

# 調査の実施にあたって

この夏休み、中学生たちと接触することの多い毎日を送った。英語の研修も兼ねて、夏休みの間、アメリカの家庭にホーム・ステイをする中学生たちと行動をともにしたからである。

親の束縛から離れて、アメリカでの3週間に及ぶ団体生活であるだけに、現代の中学生たちの素顔をかいま見る機会が多かった。髪の手入れに、毎朝30分もかける男の子。それほど暑くもないのに、まるで海水着のような両肩まる出しのシャツを着てくる女の子。かと思えば、リーゼント・スタイルにサングラスをかけ、皮のジャンパーをはおって、いきがっている男の子。唇に濃いルージュをぬり、どこから見ても、はたち過ぎとしか見えぬ女の子。

昭和一けた生まれの筆者は、彼らの行動にさながら異邦人を見る思いがした。しかし、そうした中学生たちが、取るに足らぬささいなことからホーム・シックにかかって涙を流し、そうかと思えば、1枚のガムの配分をめぐって、口論を始める。また、派手な服装を注意すると、それまでと打って変わって、ジーンズとTシャツというさっぱりした格好で姿を現す。

「つっぽり」と「素直さ」、「過度なまでの自意識」と「自信のなさ」などが、アンバランスに混在しているのが、中学生の実像なのであろう。

前号の「モノグラフ vol.1 学校生活の楽しさに関する考察」では、中学生の学校生活、なかでもとりわけ、学業についての意識を焦点に据えた分析を試みた。そこで、今回の調査では学業以外の生活に目を向け、中学生の余暇行動とそれを支える意識の解明に全力を注ぐことにした。幸い、中学校の協力を得て、順調にデータを収集することができた。本調査にご協力いただいた各中学校の先生方、及び、生徒諸君に感謝の気持ちを表しておきたい。それと同時に、本調査に全面的に援助や協力をしていただいた株式会社福武書店社長・福武哲彦氏をはじめ、福武書店の方々にお礼の言葉を述べたいと思う。なお、調査実施にあたっては、通信教育部指導部長・加藤智喜氏、調査室担当の宮崎一子氏、片山知恵子氏などの協力を得た。

また、本調査の計画・分析を試みたのは、以下の3名である。

奈良教育大学教授 深谷 昌志

千葉大学専任講師 明石 要一

筑波大学大学院博士課程 西口 加代

報告書作成にあたっては、3人の討議をもとに、第I章第2節、第II章を西口が、第I章第1節、第III章を明石が執筆し、深谷が、全体を調整し、加筆する形式をとった。

昭和53年9月

奈良教育大学教授・教育学博士

深谷 昌志

## I章

# 余暇の実態を求めて



## 1 調査票の構成

「中学生の余暇」と題されたこのモノグラフでは、文字どおり、中学生の余暇行動の分析を目的としている。

通常、「余暇」とは「本業以外の活動領域」を意味している。したがって、さしづめ、中学生にとっての余暇とは、勉強以外の場面となるのであろうか。そして、中学生の余暇という言葉に、我々おとなたちは、2つの相反する中学生像を思い浮かべる。一方は、高校受験に押しつかれた中学生の姿であり、もう一方は、非行との接点を持つ反抗的な中学生たちである。しかし、中学生全体の中で両者がどの程度の割合を占め、そして、平均的な中学生たちがどのような余暇を過ごしているのかは、いまひとつ明らかでない。

そこで、本調査実施にあたっては、まず、中学生の余暇行動の実態を把握するのに努めることにした。しかし、余暇の過ごし方は、本人の意識を反映した行動形態であるから、現実の姿を正確に理解するためには、中学生たちの意識に分析のメスを入れていかねばならない。そこで、調査票作成にあたって、中学生たちの抱く欲求や願望などを考慮に入れ、余暇行動を支える意識の解明も共に試みることにした。

なお、調査票の構成は、以下のとおりだが、巻末に、調査票を添付してある。

- ① 余暇の過ごし方について、どの程度の充実感を持っているかを5段階で評価を求めた
- ② 期末テスト後の欲求、何をしたいかを10の行動について5段階評価を求めた
- ③ 同様に、夏休みの最初の1週間の過ごし方の欲求、11項目
- ④ ラジオ聴取の実態
- ⑤ 友だちづきあい

- ⑥ クラス・イメージ、自分の学級のクラス・メートたちで、「1対1で異性とつきあっている」など13の項目についての経験者はどのくらい存在するかを尋ねた
- ⑦ 男女交際、おしゃれなど4つの領域における欲求、17項目
- ⑧ 中学生に関する規範意識、8項目
- ⑨ 学習の方法（家庭教師、学習塾、通信教育）の利用と希望
- ⑩ その他、勉強時間、こづかいなどフェース・シートにあてはまる項目

調査対象は、名古屋と東京の中学生1,114名である。なお、内訳は、中学1年生359名、2年生533名、3年生222名、男子568名、女子546名である。

## 2 放課後の過ごし方

**授業に満ち足りた感じを持つのは約2割**

1日の授業時間を全部終えて、ホッと一息つく放課後、中学生たちはどうするのであろうか。すぐに帰宅して勉強するのだろうか。クラブ活動へと急ぐ生徒もいるだろう。学習塾へ直接足を向ける生徒もいるかもしれない。

しかし、放課後の分析へ進む前に、中学生たちが授業にどんな態度で臨んでいるのかを簡単に紹介しておきたい。

まず、表1に目をとめてほしい。これは、授業を受ける態度が熱心かどうかの自己評価を求めたものだが、学年や性を越えて、「少し熱心」が4割を越えており、これに、「熱心とも、そうでないともいえない」を含めると、ほぼ7～8割の中学生たちが、「まあ熱心」という態度で、授業に臨んでいることがわかる。つまり、中学生にとって、授業とは熱心、不熱心というより、仕方なしに出席する義務感を感じる活動なのであろうか。もっとも、表2に一例を示したように、勉強に自信を持つ中学生は、たかだか2割にすぎず、ほぼ4割は、自分の成績が平均以下だと思い、残りの4割も、「まあ普通程度」と考えている。単純な試算を行うなら、成績に自信を持つ者が2割で、「とても熱心に授業を聞く」と答えた者が、ほぼ1割5分。したがって、学校の授業に意欲的に取り組み、そして、授業の中で、充足感を味わっているのは、ほぼ2割の生徒にすぎず、あの8割は、満ち足りぬ思いで、放課後の時を迎えるのかもしれない。

**表1 授業中の熱心さの自己評価**

学年男女 \ 热心さ	とても熱心(1)	少し熱心(2)	どちらともいえない(3)	あまり熱心でない(4)	ぜんぜん熱心でない(5)	% 平均 値
1年	男子 20.6	46.0 69.9	23.9	8.9	0.6	2.23
	女子 12.5	54.6 79.0	24.4	8.5	0.0	2.24
2年	男子 9.8	40.7 72.0	31.3	14.2	4.0	2.62
	女子 5.5	42.7 77.5	34.8	14.6	2.4	2.66
3年	男子 16.0	41.5 71.7	30.2	5.7	6.6	2.46
	女子 11.4	42.1 71.9	29.8	14.9	1.8	2.54

**放課後の  
過ごし方に  
3つのタイプ**

こうした数値を踏まえながら、本モノグラフの主題ともいうべき放課後の過ごし方に、筆を進めることにしよう。

図1は、放課後、すぐ帰宅するかどうかの学年・性別の変化をパーセントの形で表したグラフである。3年生になると、さすがに、受験を意識してか、「すぐ帰宅する」生徒の割合が4割を越え、クラブ活動に時を過

ごす者が減少している。しかし、全体としてとらえると、放課後の生徒たちは、大別して、  
①すぐ帰宅する者 ②教室でプラプラする者 ③クラブ活動に打ち込む者とに、ほぼ三分  
されている印象を受ける。

これらのグループのうち、①と③のグループの行動は理解しやすいが、「教室でプラブ  
ラする」とは、どんな気持ちの行動なのであろうか。「やれやれ、授業が終った。家へ帰  
ってもひとりきりだし、友だちとしゃべっていこうか。」そんな心情が伝わってくるよう  
な気がする。

表2 成績の自己評価

成績		5番 以内 (1)	10番 ぐらい(2)	まん中 (3)	少し うしろ(4)	ぐんと うしろ(5)	% (N)
学年男女							
1年	男子	10.0(18)	9.4(17)	46.7(84)	21.7(39)	12.2(22)	3.15
	女子	4.7(8)	8.1(14)	51.7(89)	26.7(46)	8.7(15)	3.27
2年	男子	6.5(18)	14.1(39)	38.5(106)	27.9(77)	13.0(36)	3.27
	女子	4.4(11)	11.7(29)	50.4(125)	21.4(53)	12.1(30)	3.25
3年	男子	10.6(11)	12.5(13)	39.4(41)	20.2(21)	17.3(18)	3.21
	女子	7.1(8)	15.0(17)	44.3(50)	22.1(25)	11.5(13)	3.16

図1 放課後すぐ帰宅するか

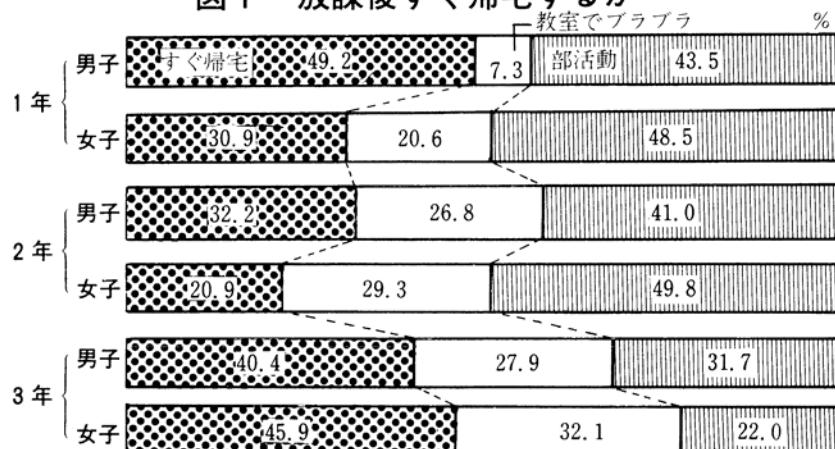
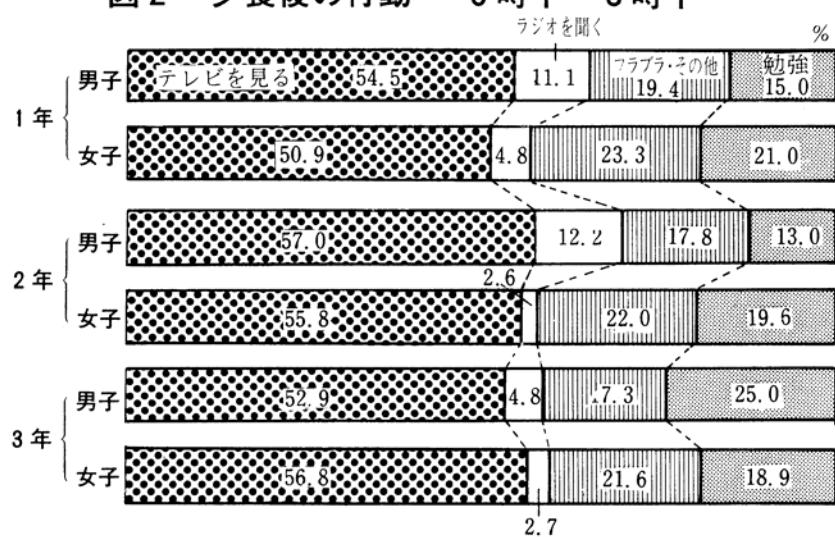


図2 夕食後の行動—6時半～8時半



**夕食後はテレビ  
を友として**

それでは、もう少し、時間帯を遅くして、夕食後、6時半から8時半頃に時間を限定し、生徒たちの行動を追いかけることにしよう。

図2に示すように、学年や性を越えて、5割を上回る生徒たちが、ブラウン管を見つめていた。中学生というと、高校進学を連想して、夕食後すぐに、勉強を始めるのかと思っていたが、そうした勉強派は、3年生にやや多いものの、全体のほぼ2割にすぎなかった。

ちなみに、生徒たちの家庭での勉強時間は、平均して、1年生が1時間45分、2年生が1時間40分、3年生が1時間46分であった。もっとも、この数値には、かなりのちらばりが認められ、「ほとんど勉強していない子」逆に、「毎日3時間以上も勉強している子」が、それぞれ9%を占めているから、一口に、中学生といって、その生活の姿には、さまざまなタイプが存在するのであろう。

しかし、平均していえば、夕食後の2時間ほどをテレビを見ながら過ごし、その前後に、1時間半ほど勉強をするというのが、中学生の平均的な姿であった。勉強しなければという心理的な圧迫感はともあれ、長いテレビ視聴は予想外だった。

勉強時間をみたついでに、どのような学習形態を利用して勉強しているか、学習塾、家庭教師、通信教育の利用率にふれておこう。学習塾は、学年でほとんど差がなく、1、2年生で50パーセント弱、3年生では53パーセントと、全体の約半分が塾通いをしていた。通信教育は、1年生で14.5パーセント、2年生で18.8パーセント、3年生は21.2パーセントと高学年になるほど利用率が増加している。家庭教師もやはり、他の学年よりは3年生の利用率が高いが、全体に少なく10パーセントに満たない。

なお、今後の利用希望としては、表4に平均値を示したように最も高い希望率を示しているのは、「仲間で評判のよい通信教育」で、次いで「一流高校への合格率の高い進学塾」

**表3 学習形態の利用率**

% (N)

学年	学習塾	通信教育	家庭教師
1年	49.3 (173)	14.5 (51)	6.8 (24)
2年	48.2 (257)	18.8 (100)	5.3 (28)
3年	53.2 (118)	21.2 (47)	9.9 (22)
合計	49.2 (548)	17.8 (198)	6.6 (74)

注) 数値は、それぞれ学年の総数、全体の総数を100としたものである。

**表4 家庭学習に対する希望(平均値)**

とても  
利用したい  
5  
少し  
4  
どちらでも  
ない  
3  
あまり  
したくない  
2  
全然利用  
1

学年男女	一流大学生の家庭教師	合格率の高い進学塾	評判のよい通信教育
1年	男子 2.36	2.96 >	2.72
	女子 2.26 <	2.52 <	2.95
2年	男子 2.22	2.84 >	2.77
	女子 2.25 <	2.48 <	2.80
3年	男子 1.96 <	2.30 <	2.44
	女子 2.32 <	2.43 <	2.77
全 体	2.24 <	2.63 <	2.77

最後に「一流大学の学生の家庭教師」となっていた。

今まで、放課後から夕食後にかけての生徒たちの行動を追跡してきた。本来だと、これから、深夜にかけての生活ぶりを記述することになるが、この時間帯については、後ほど、ラジオ聴取に関連させて考察を進めることにしたい。

### 3 夏休みの過ごし方

期末テストの後  
は、ややのんび  
りしたい

これまで、中学生が通常の1日をどう過ごすのかを考察してきた。

夕食後、テレビを2時間ほど見るほか、その前後に1時間半程度の勉強をするのが、平均的な中学生の日課であった。それでは、もう少し、ゆったりとする時間を持てたとき、中学生たちは、どんな余暇行動をとるのであろうか。

数日間のくつろぎの時といえば、まず、期末テストの終了後が頭に浮かんでくる。そこで、

「今度の期末テストの最後のテストが終ったら、その日はいったい何をしていると思いますか。」

の質問文で、テスト後の行動についての予想を求めてみた。

「やれやれテストが終った」というので、生徒たちは、解放感を求めて、あてもなく街をさまよい歩いたり、心ゆくまで、深夜放送に耳を傾けているのではないか。そうした可能性を考慮した設問なのだが、結果は、表5に示したとおりである。

期末テストが終ったからといって、「仲間と街をブラついたり」「友だちと映画を見たり」あるいは、「深夜放送に聞き入る」のは、「少ししている」「するかもしれない」を含めて、10%前後にすぎなかった。そして、「のんびりボケッとしている」についても、45.4%の生徒は、「そんなつもりはない」と答えている。わずかに、テスト後らしい傾向は、「テレビを見ている」や「好きな趣味に打ち込む」のが、4割を越える点に認められるにすぎない。

考えてみると、大学生などと違って、期末テストが終ったからといって、翌日から休み

表5 期末テスト後の余暇行動

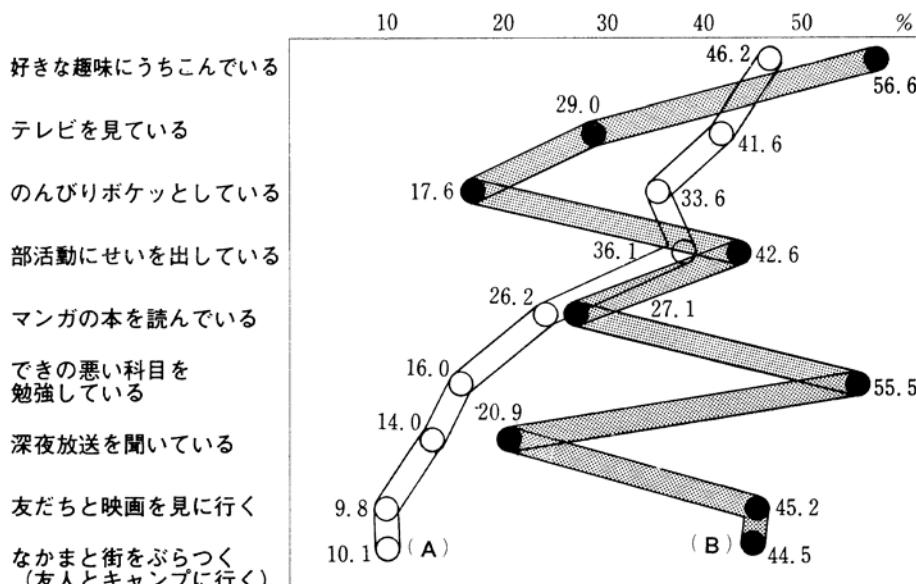
% (N=1114)

スケール アイテム	まったくし てている(1)	すこし している(2)	どちらとも いえない(3)	あまりして いない(4)	ぜんぜんし ていない(5)	平均 値
好きな趣味にうち こんでいる	19.7 46.2	26.5	19.8	19.4 34.0	14.6	2.83
テレビを見ている	11.9 41.6	29.7	20.0	27.9 38.4	10.5	2.95
のんびりボケッと している	9.7 33.6	23.9	21.1	28.9 45.3	16.4	3.18
部活動にせいを 出している	15.1 36.1	21.0	18.8	14.6 45.1	30.5	3.24
マンガの本を読ん でいる	9.3 26.2	16.9	16.4	26.9 57.4	30.5	3.52
できの悪かった科 目を勉強している	2.9 16.0	13.1	19.1	30.1 64.9	34.8	3.81
深夜放送を聞いて いる	4.8 14.0	9.2	8.2	16.7 77.8	61.1	4.20
友だちと映画を 見に行く	3.7 9.8	6.1	9.8	19.2 80.4	61.2	4.28
なかもと街を ぶらつく	3.6 10.1	6.5	9.3	18.3 80.6	62.3	4.29

表6 夏休みの余暇行動

%(N=1114)

アイテム	スケール	とても したい (1)	すこし したい (2)	どちらとも いえない(3)	あまりした くない(4)	ぜんぜんし たくない(5)	平均 値
好きな趣味にうち こみたい		30.3 56.6	26.3	19.0	13.1 24.4	11.3	2.48
苦手な科目をじつ くり勉強したい		22.3 55.5	33.2	20.8	16.3 23.7	7.4	2.53
なかの良い友だちと キャンプに行きたい		25.1 44.5	19.4	19.0	18.0 36.5	18.5	2.85
部活動にせいを 出したい		21.2 42.6	21.4	20.4	15.4 37.0	21.6	2.95
友だちと映画を 見に行きたい		22.2 45.2	23.0	14.9	16.5 39.9	23.4	2.96
テレビを好きなだ け見たい		10.2 29.0	18.8	24.4	32.1 46.6	14.5	3.22
マンガや週刊誌を 読みたい		10.5 27.1	16.6	20.9	29.1 52.0	22.9	3.37
何もしないでのんびり ボケッとしていたい		5.5 17.6	12.1	18.7	29.0 63.7	34.7	3.75
深夜放送を 聞きたい		10.2 20.9	10.7	12.4	17.0 66.7	49.7	3.85

図3 期末テスト終了後と夏休みの余暇行動の比較  
——してみたいと答えた%——

注1) (A)期末テスト終了日の余暇行動 (B)夏休みの余暇行動

注2) 数値は「まったく」と「少し」を加えた「したい」と答えた者の合計

が始まるわけでもないから、それほどのんびりとした気持ちになれないのも無理からぬところであろう。それはともあれ、せいぜいのんびりひとりで、趣味やテレビ視聴を楽しみながら疲れをいやしているのが、期末テスト後の中学生の姿であった。

夏休みには、  
いろんなことを  
やりたい

それでは、期末テストの終了というような一時的なものではなく、かなりの期間、休みがとれたら、生徒たちの余暇行動は活発になるのであろうか。そこで、

「今度の夏休みが始まったら、最初の1週間くらいはどのよう

にすごしたいと思いますか」

の形で、夏休み初めの余暇に対する期待を求めるにした。さすがに夏休みらしく、生徒たちは、「好きな趣味に打ち込む」と同時に、「苦手な科目をじっくり勉強し」「仲良しの友だちとキャンプに行き」「部活動にせいを出す」などについて積極的な反応を示していた。それと同時に、長期の余暇のとれる夏休みの場合、「深夜放送を聞く」や「のんびりボケッとする」「テレビを見る」などのような休息型の余暇について、消極的な態度を示すのも特徴的な傾向であった（表6）。

そこで、期末テストの後のような「短期間の余暇」と夏休みのような「長期間の余暇」との過ごし方の違いを調べるために、「少し」と「とても」を加えて、「してみたい」と答えた者のパーセントを示すと、図3のような結果が得られる。グラフの中で「短期間の余暇」の方に期待が高いのは2項目、具体的には「テレビを見る」と「のんびりボケッとする」であった。それに対し、「長期間の余暇」に欲求が強かったのは、「苦手科目の克服をする」や「友だちと映画を見る」「街をぶらつく」などの項目であった。

表7 夏休みの余暇行動の相関係数

	苦手科目の勉強をしたい	友人とキャンプに行きたい	部活動にせいを出したい	友人と映画・コンサートに行きたい	テレビを見たい	マンガを読みたい	のんびりボケッとしたい	深夜放送を聞きたい
好きな趣味にうちこみたい	0.03	0.10	0.10	0.12	0.06	0.40	0.02	0.18
苦手科目の勉強をしたい		-0.04	0.14	-0.05	※0.22	※0.17	※0.15	※0.17
友人とキャンプに行きたい			0.16	※0.34	0.22	0.28	0.06	0.22
部活動にせいを出したい				0.18	-0.01	0.03	0.01	-0.03
友人と映画・コンサートに行きたい					0.22	※0.30	0.14	※0.31
テレビを見たい						※0.59	※0.36	0.24
マンガを読みたい							※0.31	※0.31
のんびりボケッとしたい								0.18

※  $r \geq 0.3$  or  $r \leq -0.1$

図4 夏休みの余暇行動の相関略図

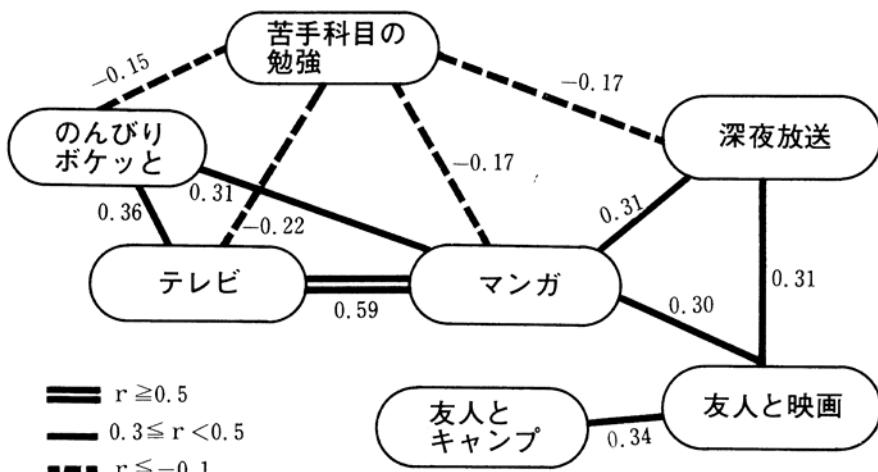


表8 夏休みの余暇行動の学年別推移（平均値）

アイテム	学年	中 1	中 2	中 3	推 移
好きな趣味にうちこみたい	2.47	2.45	2.59	→	
苦手な科目をじっくり勉強したい	2.45	2.66	2.37		
なかの良い友だちとキャンプに行きたい	2.66	2.90	3.04	↗	
部活動にせいを出したい	2.71	2.84	3.60	↗	
友だちと映画を見に行きたい	3.16	2.81	3.00		
テレビを好きなだけ見たい	3.12	3.25	3.30		
マンガをたくさん読みたい	3.37	3.40	3.32	→	
何もしないでのんびりボケッとしていたい	3.88	3.74	3.58	↗	
深夜放送をたっぷり聞くたい	4.19	3.68	3.71	↗	

注) ↗学年とともに上昇, ↙学年とともに下降, →学年に変化なしを示している。 1 2 3 4 5  
とても 少し どちらとも あまり ぜんぜん  
したい したい いえない したく ない ない

このように、生徒たちは、「短期間の余暇」ではのんびりボケッとして疲れをとり、「長期間の余暇」には、勉強、友だちとの接触、趣味など、多方面の活動に時を過ごしたいと考えている。

「のんびり過ごす」と  
「苦手科目の克服」  
は両立できない

なお、念のため、夏休みの過ごし方についての関連を見るために、相関係数を求めたのが、表7である。しかし、この表では、理解しにくいと思うので、相互に関連の深い項目を取り出し、相関係数の0.5以上の項目間に(=), 0.3以上, 0.5未満に(—)を付してある(図4)。参考までに、弱い逆相関を示した項目に(……)をつけたが、この図4から明らかなように、残念ながら、「苦手科目の克服」と「テレビ」や「マンガ」とは両立しにくいらしい。

つまり、長期間の余暇のとれる夏休みに、「テレビやマンガを見たり」「のんびりボケッしたり」「深夜放送を聞く」などに关心を寄せるようでは、苦手科目の勉強などは望み得ないというのであろうか。それほど今の学力競争は激しいのかもしれない。

今まで、中学生をトータルとしてとらえて、夏休みの過ごし方を追ってきたが、一口に中学生といっても、余暇の過ごし方には、学年により相違が見られる。表8に、平均値の形で、学年別推移を示したが、この結果によると、学年を追うにつれて、意欲が減退する項目と、逆に、意欲の高まる項目が存在しているのがわかる。

例えば、学年が上がるにつれて、意欲が薄れるのが、「なかの良い友だちとキャンプに行く」と「部活動にせいを出す」であり、逆に、欲求が強まるのは、「何もしないでのんびりボケッとする」「深夜放送をたっぷり聞く」であった。中学3年生ともなれば、現実に勉強をする、しないはともかくとして、勉強の圧力が生徒たちの心を圧し始める。そのため、夏休みになるからといって、キャンプや部活動に浮かれるわけにもいかない。しかし、ほんの一時でも良いから、勉強を忘れて、のんびりボケッとする時間を持ちたい。表8に、中学生たちのそうした心情が吐露されているような思いがしてならない。

## Ⅱ章

# 友情と孤独との谷間で



## 1 友だちとの接触

中学生は、自我を確立する時期だといわれる。未成熟な自我を抱えながら、自分とは何かと問い合わせ続ける世代でもある。彼らは、自我を確立するために、無理にでも、親や教師などのようなおとなたちの持つ既成の権威に反発を示す。しかし、その一方でまだ自分自身に自信を持てないから、友だちとの連帯の中に、自分の確かさを求めるようとする。とはいっても、友だちもまた、別の人格を持つ存在であり、当然のことながら、友だちが、常に、心の安らぎを与えてくれるとは限らない。心の底から、友だちを求める気持ちと、それと裏腹に、友だちとの違いに敏感に反応する繊細さが共存する。いわば、こうした過度なまでの繊細さは、「自分とは何か」つまり、自我の確立を求める中学生らしさの表れなのであろう。

換言するなら、心の友を求めながら、友だちを得られずに孤独を味わう。中学生とは、こうした友情と孤独との谷間に位置する世代とも言えよう。

そこで、この章では、まず、余暇に関する、中学生の友情に簡単にふれ、次に、孤独を象徴するものとして深夜放送を取り上げ、その後に、余暇行動についての充足度を考えることにしたい。

**女子は、友だちとの間で秘密を共有する**

表9は、休み時間の過ごし方についての学年と性別の集計だが、改めて述べるまでもなく、学年や性を越えて、ほぼ9割の生徒が、友だちとのおしゃべりに時を過ごしているのがわかる。

仲間から孤立している中学生がいるのではないかと懸念して、念のため「なかの良い友だちがいるか」を尋ねてみたが、さすがに、親友のいない中学生

は、男子で5%，女子で3%にすぎなかった(表10)。もっとも、クラスやクラブを含めて、数多くの仲間に囲まれているのであるから、友だちを持たぬ中学生が数%もいるのは、考えようによつては、かなり高い数値といえるかもしれない。しかし、そうした数%の生徒を除くと、中学生たちは友だちを見出していた。

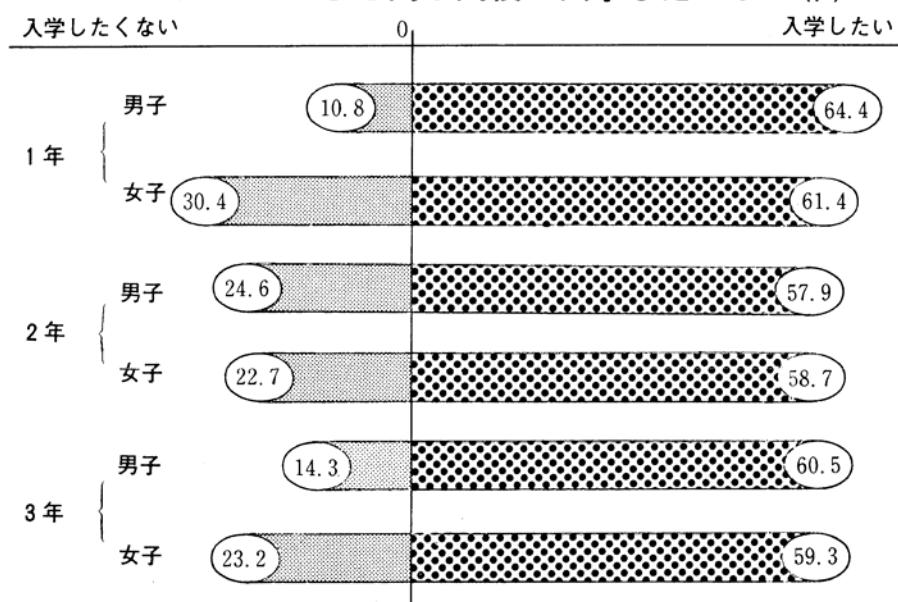
表9 休み時間の過ごし方 %

アイテム		ひとりで	友だちとおしゃべり
学年	男女		%
1年	男子	16.2	83.8
	女子	6.8	93.2
2年	男子	10.5	89.5
	女子	5.6	94.4
3年	男子	11.2	88.8
	女子	6.1	93.9

表10 なかの良い友だちがいるか %

なかの良い友だち		いる	いない
学年	男女		%
1年	男子	94.8	5.2
	女子	97.2	2.8
2年	男子	94.4	5.6
	女子	96.8	3.2
3年	男子	94.2	5.8
	女子	96.4	3.6

図5 友だちと同じ高校に入学したいか (%)



そこで、こうした友だちとの接触の程度をつかむために、いくつかの設問を試みることにした。まず、「こうした友だちと同じ高校へ入学したいか」については、予想されたとおり、学年や性を越えて、6割が、同じ高校への入学を望んでいた(図5)。学力や進路などの問題はあるにせよ、せっかく友だちとなった者とは、中学を卒業してからも、いっしょに生活を送りたいと思うのは当然の気持ちであろう。

高校生や大学生などと異なり、中学生はひとりひとりの自我が確立されていないだけに、ひとたび、友情が成立すると、そのからの中にこもって、他を排斥する集団を作りやすい。そのかわり、友だち相互では、親や兄弟にでも打ち明けない心の秘密を吐露し、その秘密を共有することによって、友情が、さらに深まる。こうした中学生の友情の一端を把握するために、「友だちに好きな異性のことを告白できるか」を尋ねてみた。

もっとも、図6に示したように、中学生のことであるから、異性の問題は、「ひそかに思

っている人がいる」が、男子の4割、女子の6割程度で、現実に、1対1のつきあいをしている者は数%にすぎない。したがって、「好きな異性」とは、多くの場合、一方的な淡い片思いにすぎないのであろうが、それだけに、そうした思いを同性の友だちに語りかけたい衝動にかられるかもしれない。

そこで、異性のことを告白できるかへ戻ると、この結果には、図7のように、大きな性差が認められた。つまり、女子の場合、8割近い者が、好きな異性について告白したと答えたのに対し、男子の告白率は、3年生でも57.1%にとどまっていた。

図6 男女交際の程度(%)

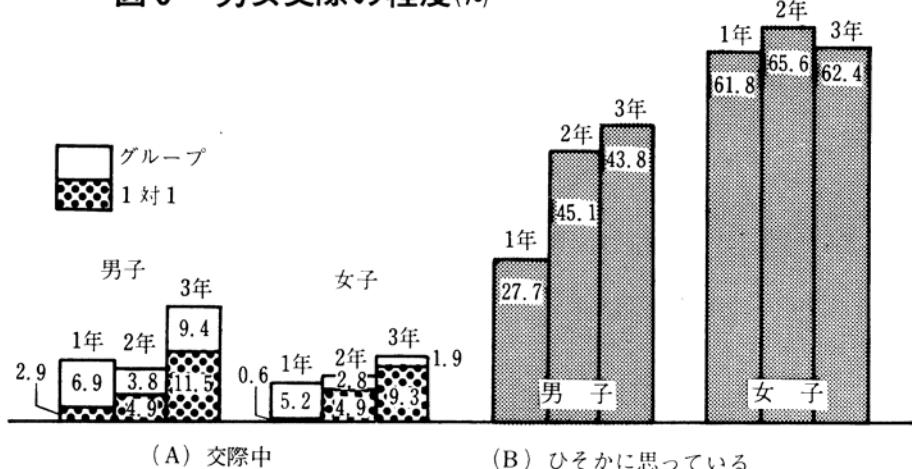
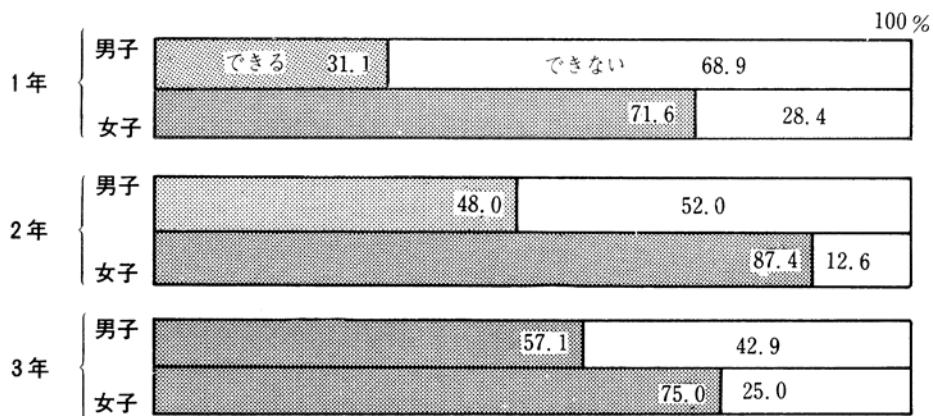


図7 友だちに好きな異性のことを告白できるか

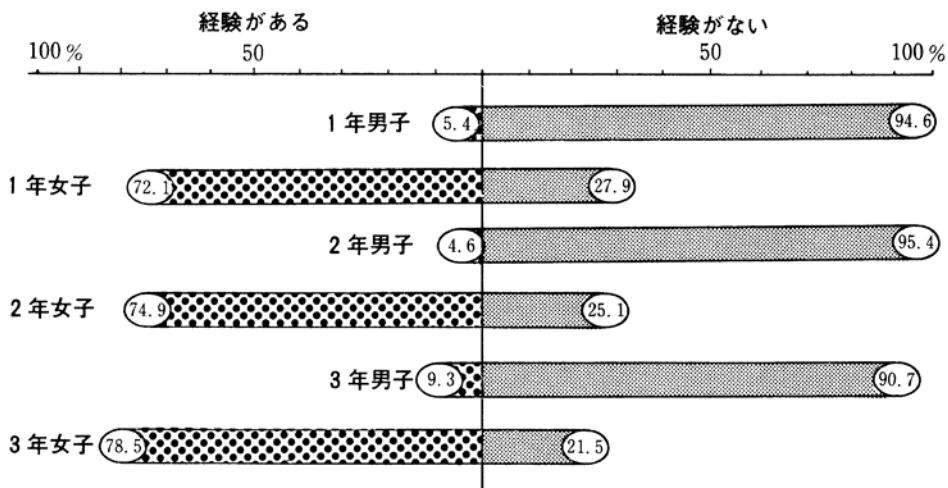


友情についてのこうした性差がなぜ生じるのかは、極めて難しい問題であるが、図7と同じ傾向は、図8の「友だちとの交換日記の有無」でも、より顕著に得られている。すなわち、男子では、交換日記をしているのが数%にすぎないのに、女子では、すでに1年生で72.1%に達し、2年生の74.9%，3年生で78.5%を数える。換言するなら、男子の場合、日記を交換するなどというのは、異例に属するが、女子については、そうした行為をしない子の方が異例となる。

2~3人で仲間を作り、日記などを通して、ひそかに思っている異性のことを話題にしながら、友だちとしての連帯感を強めていく。当然、こうした友情は親密さを持ち、仲間内のつながりが強い反面、排他的な性格を帶びよう。ほとんど——おそらく、8割を越える——の女子は、こうした友だちとの結びつきの中で、毎日を送っている。彼女らにとっ

て、もっとも楽しい時は、友だちとの語らいであり、そうした時間が、生きがいとなっているのであろう。それに対し、友だちとの関係が淡白な男子は、どんな時に、充実した感じを味わっているのか。こうした性差の問題を背景としながら、孤独の時、つまり、ラジオ聴取の問題を考えることにしたい。

図8 友人との交換日記の経験の有無



## 2 深夜放送のファンたち

**4人にひとりは  
熱心な深夜放送  
ファン**

今回の調査では、ラジオ聴取に関する質問項目を数多く含ませておいた。というのは、深夜放送に耳を傾ける中学生たちが増加しているというので、その実態を知りたかったからである。

まず、時間帯や内容はともあれ、ラジオを聞くかどうかを取り上げることにしたい。図9に示したように、「ときどき」を含めて、ラジオを聞く生徒と、聞かない生徒との割合は、ほぼ半々であった。伝えられるほどには、ラジオに聞き入る中学生の割合は高くはない。

しかし、女子に比べ、男子の聴取者が多いこと。また、男子の場合、「毎晩聞く」という固定的なファンが、2割を上回っているのが目をひく。しかも、固定ファンの割合は、中学1年生18%，中学2年生21.6%，中学3年生24.1%と、学年を追うにつれて、着実な増加を示していた。

そこで、「毎晩」あるいは「ときどき」ラジオを聴取するグループに対象を限定して、1日平均のラジオ聴取時間を算出すると、以下のような数値が得られた。

1年生 男子 2時間15分、女子 1時間37分

2年生 男子 2時間26分、女子 2時間15分

3年生 男子 2時間49分、女子 2時間39分

つまり、熱心にラジオを聞く中学生は、男子の2割、女子の1割といつても、彼らの聴取時間はきわめて長く、男子では2時間を越えて3時間に近く、女子の場合でも、3年生になると2時間39分に達していた。

そこで、問題となるのは、彼らが、いつ、ラジオを聞くのかであろうが、図10に示したように、さすがに1年生たちは、その大半が、午後11時までの聴取で、深夜番組を聞く生

徒は、男子でも2割にすぎない。しかし、2年生になると、深夜放送ファンが男子の41.3%に達し、3年生の場合、固定ファンのほぼ半数が深夜放送を聞いている計算になる。

つまり、ラジオ聴取については、一方に、ラジオにほとんど接していない集団が存在する反面、他方に、極めて長時間、ラジオに耳を傾けている生徒層が認められ、生徒間の二極化傾向が進んでいるように思われる。そこで、深夜放送に限って、聴取の実態を尋ねると、表11のようになる。全サンプルのうち、「めったに聞かない」の22.2%を含めて、56.4%，すなわち、ほぼ半数の中学生は、ラジオの象徴である深夜放送と、全く無縁の生活を送っている。それに対し、25.9%の数値が示すように、中学生の4人にひとりは、特定の日だけにせよ、熱心な深夜放送のファンを構成していた。しかも、その割合は、中学1年生の2割から、2年生の3割、3年生の3割5分と、学年を追って、高まる傾向を示している。

図9 ラジオ聴取の割合 (%)

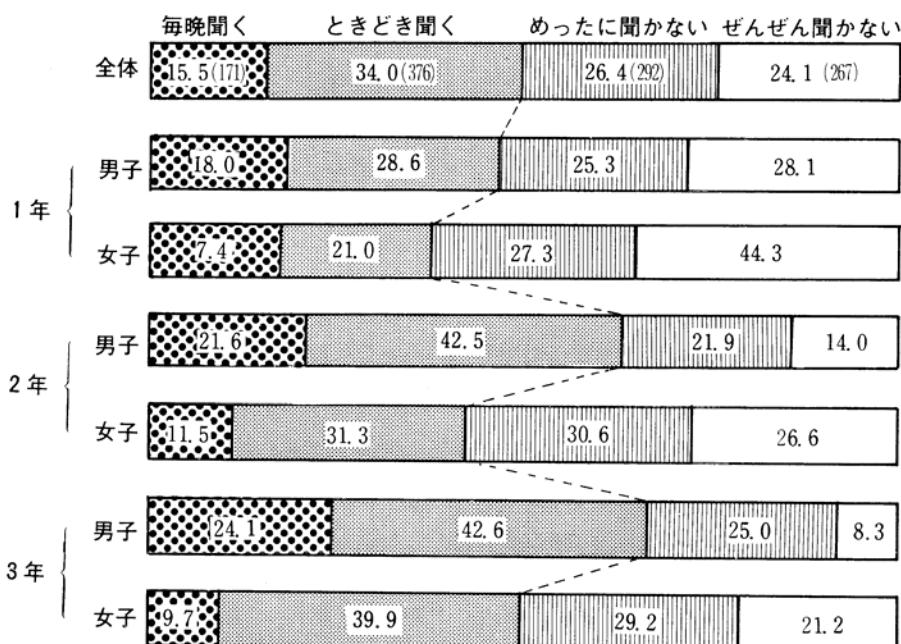
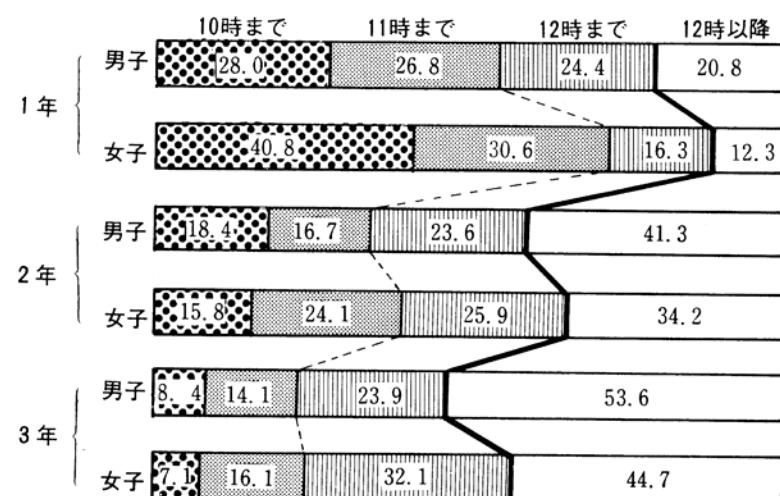


図10 ラジオ聴取時間帯 (%)



**寂しさをいやしてくれるから**

今までふれてきたように、中学生の深夜放送接触率は、「全く、あるいは、ほとんど関係なし」が56%，「たまには聞く」という浮動的なファンが18%，「特定の日」だけにせよ、熱心なファンが26%の状況を示した。（表11）

深夜放送は、当然のことながら、ま夜中に流される番組である。中には午前2時、そして3時まで、続く番組も多い。もちろん、中学生が、そんなに遅くまで、番組を聴取しているとは思えないが、彼らは、どんな気持ちで番組に接しているのだろうか。

まず、「深夜放送を何をしながら聞いているのか」の設問に対する回答は、

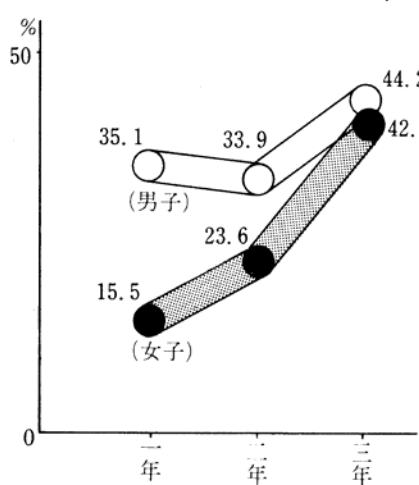
- 1 ふとんの中で 58.1% (282名)
- 2 明日の準備をしながら 19.8% (96名)
- 3 番組に集中して 8.9% (43名)
- 4 勉強しながら 8.7% (42名)
- 5 その他 4.5% (22名)

のとおりであった。つまり、勉強の終った後で眠りにつく前の一時、ラジオにスイッチを入れるのが、深夜族の平均的なスタイルらしい。

**表11 深夜放送の聴取** % (N)

	毎晩	特定の日だけ	たまに聞く	めったに聞かない	ぜんぜん聞かない
1年	6.7(13)	10.8(21)			
	17.5(34)		16.5(32)	18.0(35)	48.0(93)
男子	4.1(7)	6.4(11)			
	10.5(18)		6.4(11)	19.2(33)	63.9(110)
女子					
	13.9(38)	21.5(59)			
2年	35.4(97)		19.3(53)	24.5(67)	20.8(57)
	5.6(14)	17.3(43)	21.0(52)	21.0(52)	35.1(87)
男子	22.9(57)				
3年	13.3(14)	21.9(23)			
	35.2(37)		26.7(28)	21.0(22)	17.1(18)
女子	7.1(8)	26.5(30)	14.2(16)	29.2(33)	23.0(26)
	33.6(38)				
計	8.7(94)	17.2(187)	17.7(192)	22.2(241)	34.2(371)
	25.9(281)				

**図11 「何となく寂しくて  
ラジオを聞く割合 (%)」**



**表12 深夜放送のおもしろさ (平均値)**

パーソナリティのおしゃべりがおもしろい	3.95
投書をしている人たちの話がおもしろい	3.75
テレビでは聞けない音楽が聞ける	3.55
ゲストの話がおもしろい	3.32

評定尺度: 1(ぜんぜんおもしろくない) ~ 5(とてもおもしろい)

したがって、「ラジオを聞く理由」も、「文句なしにおもしろい」が、55.7%と半数を越えたが、「何となく寂しくて」が、30.3%に達した。さすがに、「ラジオを聞きながらの方が能率があがる」は7.6%にすぎず、「友だちと話が合わなくなるから」も、6.4%にすぎなかった。しかも、図11のように、「何となく寂しくて」深夜放送を聞く中学生の割合は、学年を追って、高まりを示し、中学3年生では、「とにかくおもしろい」と、ほぼ同じ割合を示している。

なお、深夜放送の魅力についての質問でも、表12の平均値が示すように、「パーソナリティのおもしろさ」「聴取者からの手紙」「テレビでは聞けない音楽の楽しさ」など、総合的な魅力が、中学生たちの心をひきつけていた。

すでに述べたように、中学3年生ともなると、勉強時間が増すから、家族が寝しづまった深夜、ひとりで勉強をしているうちに、孤独感が増し、つい、ラジオのスイッチを入れる。そして、パーソナリティのおしゃべりを聞く。確かに深夜放送のパーソナリティは、いわゆるマス・メディアの中では、若者や受験生の気持ちに深い理解を示す人々である。そのうえ、投書で登場する聴取者も高校生や浪人、大学生が多い。したがって、それらを聞いているうちに、自分たちと同じような気持ちや考え方を抱いている若者たちが多くいるのを知ると同時に、近い将来の自分の生き方を、聴取者とパーソナリティとのやりとりの中に見出す。それらが深夜放送を身近なものとして受けとめる背景なのであろう。彼らにとってラジオは、心のひだに語りかけてくれる唯一のパーソナルなふれあいの時なのかもしれない。

### 孤独な高学年の 男子が深夜放送 を支える

そこで、深夜放送に自我をコミットさせている中学生の姿を探るために、数量化II類を使って、分析を進めることにした。

数量化II類については、モノグラフvol.1にも記述がなされているので、それを参照してほしいが、これは、いくつかの要因を設定して、それらの要因群が、それぞれ、どの程度の重みを持って、ある現象を規定しているのかを分析する手法である。具体的にいえば、「ラジオを聞く」という行為を支える要因は何かを明らかにするのを目的としている。なお、今回の分析では、①性 ②学年 ③学業成績 ④勉強時間 ⑤放課後の過ごし方 ⑥クラブ活動 ⑦こづかいの額の7つを、「ラジオ聴取」を規定する要因に定めてある。

表13は、各要因——アイテムという——の占める割合の強さを示している。しかし、この結果だけでは、「性」や「こづかいの額」が聴取に関連しているのは理解できるが、もう少し掘り下げた、「性」の中で、より多く聴取しているのが、男子か女子なのかは——今までの結果から、男子の方に聴取者が多いのは予想がつくにしても——明らかでない。そこで、各アイテムに含まれるカテゴリー——性についていえば、男子か女子か——に着目して集計をしたのが、図12である。

この図の読み取り方は、中央の直線より、右側が、ラジオ聴取を促進する要因、左側が阻害する要因で、直線上に記載してある数値はカテゴリー・スコアを意味する、そして、カテゴリー・スコアが大きいほど促進力が増すことを、逆に、マイナスの値が増すほど阻害——この場合では、ラジオを聞かない——される割合が大きいことを示している。

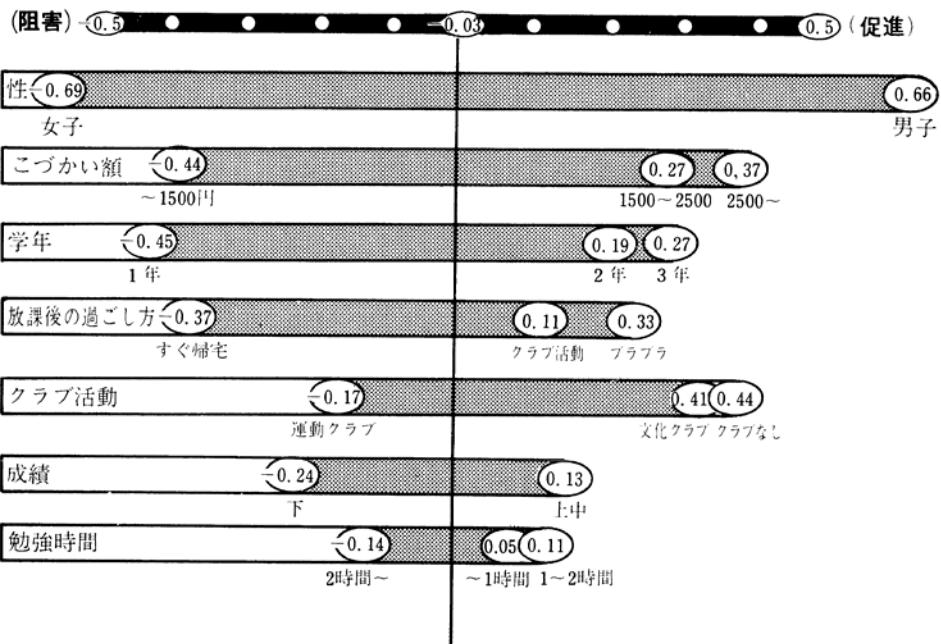
さて、図12によれば、ラジオに耳を傾けているのは、「男子」「クラブに所属せず」「こづかいが多い」「放課後、プラプラする」「3年生」などの属性であり、逆に、ラジオを聞かない中学生は、「女子」「こづかいが少ない」「1年生」「放課後すぐに帰宅」「運動クラブへ所属」などの属性を備えていた。

なお、数量化II類は、アイテム・カテゴリーを加算できる特性を持つので、それを利用して、もう少し、こまかく聴取者像を描き出すなら、「3年生(0.27)の男子(0.66)で、どこのクラブへも入らず(0.44)、放課後プラプラしているような(0.33)、成績がますます(0.13)の中学生」のスコアは、1.83となり、深夜放送の熱心なファンである確率は

表13 ラジオ聴取についての係数

ア イ テ ム	順 位	偏 相 関 係 数
性	1	0.20749
こづかい額	2	0.11617
学年	3	0.08998
放課後の過ごし方	4	0.08456
クラブ活動	5	0.07402
成績	6	0.05549
勉強時間	7	0.03443

図12 ラジオ聴取の要因 (カテゴリー・スコア)



きわめて高い。それに対し、「1年生（-0.45）の女子（-0.69）で、運動クラブに所属し（-0.17），クラブ活動に打ち込んでいる（0.11）生徒」のスコアは、-1.20で、深夜放送を聞く可能性はきわめて乏しい。しかし、同じ運動クラブに入っている女子でも、「3年生」（0.27）は、-0.48となるから1年生と比べればラジオのスイッチをときには、入れる可能性があるろう。

こうした考察はともあれ、やはり目をひくのは、先にふれた熱心な深夜放送ファンの姿であろう。「どこのクラブにも入らず、仲間との接触に乏しい、3年生の男子」に象徴されるラジオ族像は、全体の4分の1にすぎないとはいえ、現代の中学生たちの孤独な姿を端的に示している。深夜、ラジオのパーソナリティーが語りかける言葉に耳を傾け、充足感を味わっている15歳の青春は、青春と呼ぶにはあまりに貧困である。それと比べれば、交換日記などを通じて、友情を確かめあっている女子のあり方に中学生らしさを感じる。

### 3 余暇の充足度

遊んでいても勉強が気になる

今まで、友情とラジオとに焦点をしづらって、中学生の余暇の一端を紹介してきた。それでは、全体として、中学生たちは余暇の持ち方に充足感を味わっているのであろうか。

表14に、サンプル全体の回答を示したが、この結果によると、生徒たちが、かなり充足感を味わっているのは、友だちとのつきあい面であった。すでにふれたように、女子を中心に、多くの中学生が友だちとの接触の時を持っていたのが、こうした評価に連なったのであろう。また、テレビについて、十分とは言えないまでも、かなり見ているという評価を与えていた。

それに対し、「成績が上がるよう予習や復習にせいを出す」については45%が不十分を認めており、曲がりなりにも「まづまづ勉強している」と答えたのは22.8%にすぎなかった。そうした勉強面からの圧迫を心理的に感じているからであろうか、「思うぞんぶん寝る」や「好きなマンガや週刊誌を読む」についての不足感を訴えている生徒が多い。

そこで、学年を追って、こうした充足感の推移をたどってみると、図13のように、学年が上がるにつれて、予習や復習の足りなさを感じる生徒が増加している。となると、当然寝る間も惜しんで、勉強に打ち込みそうに思えるが、図中のBのように寝る時間が少ないと感じているのは、むしろ1年生で、2年生、3年生となるにつれて、寝不足を訴える生徒の割合は減少している。勉強しなければと思いつつも、なかなか机に向かえないのが中学生の現実なのかもしれない。こうした結果は、第III章で、「机に向かったらすぐ勉強ができるようになりたい」と思っている生徒が多いデータが出されるので、考察はその機会にゆずろう。

なお、勉強時間の余暇の充足感との関係を図14に示したが、勉強時間が、1時間未満のグループは、長時間勉強のグループより、「予習や復習にせいを出す」を除いて、相対的に充足感を味わっていた。逆にいえば、予習や復習に打ち込むには、好きなテレビ番組を見ず、マンガや週刊誌を読む回数を減らし、彼らなりに寝る時間を短めにするなどの努力が必要なのであろう。

こう考えてくると、このデータからも、余暇のあり方に、勉強が暗い影を投げかけてい

表14 余暇行動の充足度

	いぶ思 る んう しそ てん	い少 し して	らふ いづ うぐ	いつあ てま り いり なや	なやせ いっん てせ いん
友だちとのつきあい	32.8	25.6	31.8	7.4	2.4
好きな番組をかかさず見る	18.5	31.5	35.4	12.3	2.3
思うぞんぶん寝る	12.8	13.8	38.6	26.0	8.8
好きなマンガや週刊誌を読む	12.5	21.5	16.9	27.8	21.3
のんびりボケッとする	7.3	18.1	25.4	35.8	13.4
成績が上がるよう予習や復習をする	2.5	20.3	32.1	37.3	7.8

図13 充足感の学年別推移（平均値）

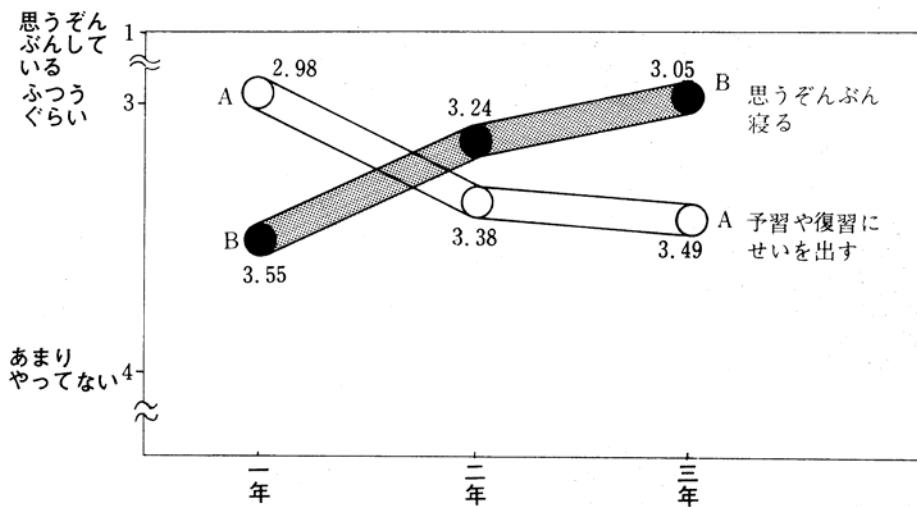
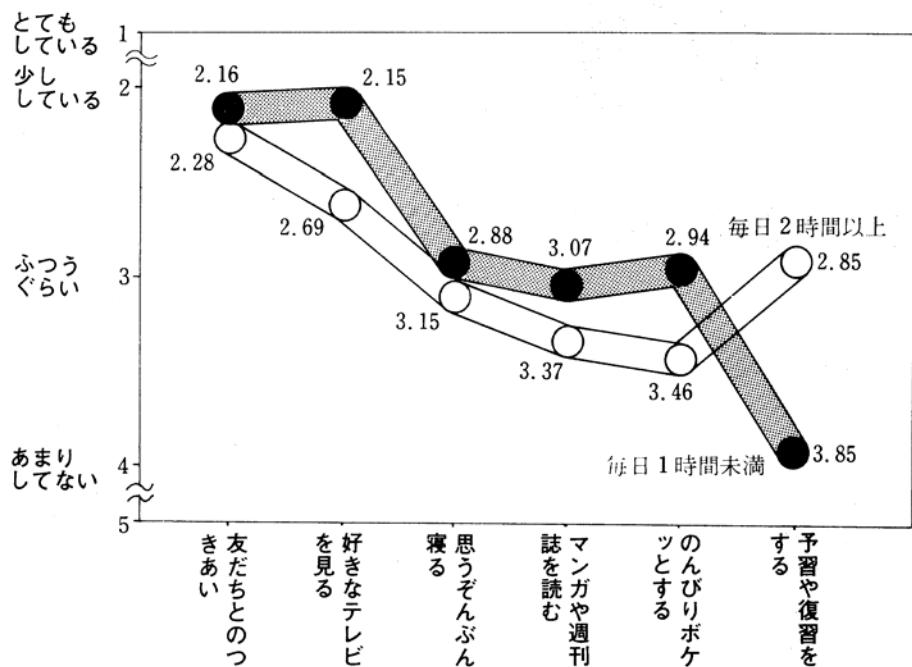


図14 勉強時間と余暇の充足感（平均値）



るのを感じざるを得なかった。中学生にとって、余暇と勉強とは相反する関係であり、余暇をどの程度、禁欲するかに、学業成績がかかっているのかもしれない。余暇の分析を進めているうちに、勉強の問題が複雑に関係してきた。しかし、学業成績については、モノグラフvol. 1で報告しているので、今回は、問題の指摘のみにとどめ、もう少し、余暇の考察を進めることにしたい。

### III章

## 中学生の余暇意識



### 1 禁欲的な中学生

#### 堅実な仲間観

今までの分析では、ひとりひとりの生徒の心情に焦点をあてて分析を進めてきた。しかし、言うまでもなく、生徒たちは、学級や学校の中で生活を送っている。

青年期を社会学的にとらえるとき、「マージナル・マン (marginal man)」とよぶことがある。「マージナル」とは周辺という意味を含む言葉だが、青年期に属する若者は、ある場面では「おとなとの真似をしてはいけない」と禁欲を要求され、他の場面では「もう子どもではないのだから」と自立を求められる。子どもの世代にも、おとなの世代にも、完全に帰属できないだけに青年期の若者はかえって「我々意識の持てるもの」を求めようとする。いつの時代でも「ユース・カルチャー (Youth Culture)」と呼ばれる若者文化が、社会の中で突起部分を形成するのは、自分たちのものを求めようとする若者らしさの表現とみなすことができよう。

特に、中学時代は、親や教師に象徴されるおとなの権威に反発を感じる世代だけに、仲間たちの作る文化、いわゆる「中学生文化」と、同調行動をとる割合が高い。こうした観点から、中学生たちのかもしだすふんい気を知るために、「自分のクラスの中で何人のものが、どんな行動をしていると思うか」を、生徒たちに尋ねることにした。調査票の中の回答選択肢では、「0人」「2~3人ぐらい」「10人ぐらい」「半分ぐらい」「30人以上」としておいたが、集計上、「半分ぐらい」と「30人以上」とを1つのカテゴリーにし「半分以上」と、まとめてある。単純集計の結果を表15に示したが、12の質問項目に対する回答は、大別して、3つに分かれていた。

表15 クラスのようす

%/N

アイテム	クラスの中の人数	半分以上	10人 くらい	2~3 人くらい	0人	計
毎日テレビを2時間見ている人	63.6	23.4	9.5	3.5	100.0	1089
タレントのレコード・ポスターを集めている人	57.1	32.6	8.7	1.6	100.0	1082
趣味にこっている人	50.2	31.9	14.3	3.6	100.0	1085
毎週マンガを買っている人	49.8	30.6	14.5	5.1	100.0	1087
異性に思いをうちあけられない人	43.3	23.8	19.0	13.9	100.0	1095
毎日勉強を3時間くらいしている人	37.0	36.6	21.7	4.7	100.0	1099
好きな歌手の生のコンサートを聞いたことのある人	15.7	38.6	35.2	10.5	100.0	1097
学校の帰り道買い食いをしたことのある人	20.8	17.7	27.7	33.8	100.0	1085
夜、友だちと長電話をしている人	6.0	14.0	50.2	29.8	100.0	1069
異性と1対1でつきあっている人	4.1	7.3	40.1	48.5	100.0	1089
ひそかにタバコをすったことのある人	2.8	7.0	29.8	60.5	100.0	1086
ディスコにおどりにいったことのある人	2.4	2.5	18.4	76.7	100.0	1086

## (1) 半分以上の友だちがしていると思えるもの

1. 毎日、テレビを2時間くらい見る
2. タレントのレコードやポスターを集めめる
3. 趣味にこる
4. 毎週マンガを買って読む

## (2) 半分くらいか、4人にひとりくらいがしていると思っているもの

1. 異性に思いを打ちあけられない
2. 每日、3時間くらい、勉強をする
3. 好きな歌手の生のコンサートを聞く
4. 学校の帰り道に、買い物をする

## (3) せいぜい、クラスの中で2~3人しかしていないと思っているもの

1. 夜、友だちと長電話をする
2. 異性と1対1でつきあう
3. ひそかにタバコをすう
4. ディスコにおどりに行く

これらのデータによると、中学生たちは仲間に対して、「社会的に禁止されているようなことをしている子は、きわめて少ない」という評価を与えていた。きわめて堅実な中学生だが、言うまでもなくこれらは、生徒たちの作りあげたイメージにすぎないから、このイメージが実像かどうかは、改めて検討を必要としよう。

先ほど紹介した、友だちについてのデータによれば、「異性と1対1の交際をしている」のは、約5%にすぎないが、「ひそかに思っている異性がいる」と答えた者は5割(図6)に達していた。また、「夕食後テレビを見ている者」5割(図2)「好きなテレビ番組をかかさず見ている者」が5割(表14)などのデータは、表15に示された仲間の行動に対する評価が実際に近いことを意味している。もっとも、こと勉強に関しての評価は、実像とかな

りかけ離れていた。つまり、「毎日3時間以上、勉強している者」が、クラスに半分以上はいると思っている者が、37%に達したのに対し、現実に、「3時間以上勉強している」生徒は、1割に満たなかった。換言するなら、生徒たちは、「自分は、1~2時間しか勉強していないが、友だちはもっと長い時間、勉強をしているらしい」というような過大評価を、友だちの勉強ぶりに与えていた。ここにも勉強について敏感な中学生像の一端をかいま見た思いがするが、ここでは問題の指摘のみにとどめ、もう少し分析を進めてみよう。

### 中学生らしさとは何か

先ほどの表15は、仲間たちが、どんな行動をとっているかについての推定であった。

しかし、現実の行動はともあれ、それらの行動を望ましいと思うかどうかは、別種の事がらに属する。そこで、「次に、中学生に関する意見があります。あなたは、それについてどう思いますか」という質問文で、行動についての価値判断を生徒たちに求めることにした。

結果を表16に示したが、大づかみにすると、生徒たちは、「テレビはほどほどにし、毎日3時間くらいは勉強すべきだ」、「男子がヘアトニックをつけたり、女子が透明のマニキュアをつけるのは、中学生らしくない」と考えていた。

調査票作成段階で、筆者らは、ひょっとすると、ヘアトニックや透明のマニキュアについて、現実には禁止されているにせよ、3割程度の賛成者がいるのではないかと予測していた。しかし、中学生の中で、賛成者は10%前後にとどまっていた。また、「男女交際はグループでのつきあいが望ましい」や「マンガは、そろそろ卒業すべきだ」の意見に対する賛成者が、それぞれ、39.1%，25.2%に達したのも、予期した以上の高さであった。

発達心理学の概説書に、「理想追求から現実的な見通しへ」の転換が、青年期前期にみられるとき書かれている。異性関係について言うなら、理想的な異性像を抱いて、ストイック（禁欲的）な関係にとどまる段階から、生身の人間としての衝動に基づきをおく段階へという変化である。こうした指摘に従うなら、表16などのデータは、中学生の価値観が、禁欲的で、理想追求的な色彩を帯びていることを示している。

なお、念のため、表16の8項目について、相関係数を求めると、表17のとおりとなる。このうち、相関の強い、あるいは、逆相関がみられた項目のみを抜きとってグラフ化したのが、図15である。

このグラフによると、中学生たちは、「テレビを見るのは、ほどほどにし」「マンガを卒業して」「毎日3時間くらい勉強をする」のが、理想的な中学生なのであって、「マニ

表16 中学生についての意見への態度 % N

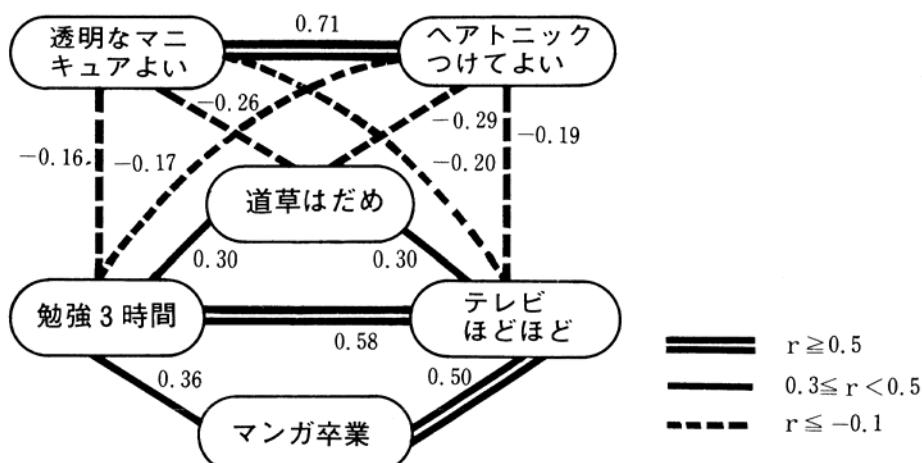
スケール アイテム	賛成	どちらともいえない	賛成でない	計
3時間くらい勉強すべきだ	61.5	22.0	16.5	100.0 1095
テレビはほどほどにしたほうがよい	52.2	25.9	21.9	100.0 1102
下校のとき道草をくってはいけない	45.4	29.4	25.2	100.0 1101
男女交際はグループでのつきあいがよい	39.1	43.0	17.9	100.0 1097
マンガは卒業すべきだ	25.2	28.8	46.0	100.0 1101
部活動は2年生くらいまででよい	18.9	27.5	53.6	100.0 1094
男子はヘアトニックくらいつけてもよい	13.0	16.7	70.3	100.0 1097
女子は透明のマニキュアくらいしてもよい	8.5	17.8	73.7	100.0 1103

表17 中学生についての意見の相関係数

	テレビはほどほどに	道草をしてはいけない	男女交際はグループで	マンガは卒業すべきだ	部活動は中2まで	男子はヘアトニックをつけてよい	女子はマニキュアをつけてよい
3時間くらい勉強すべきだ	0.58※	0.30※	0.01	0.36※	0.18	-0.17※	-0.16※
テレビはほどほどに		0.30※	0.07	0.50※	0.19	-0.19※	-0.20※
道草をしてはいけない			0.10	0.19	0.04	-0.29※	-0.26※
男女交際はグループで				-0.07	-0.06	-0.03	0.02
マンガは卒業すべきだ					0.28	-0.09	-0.09
部活動は中2まで						0.02	0.06
男子はヘアトニックをつけてよい							0.71※

※  $r \geq 0.3$        $r \leq -0.1$

図15 中学生についての意見の相関略図



「キュアをぬつたり」「ヘアトニックをつけたり」するには、中学生らしからぬ行動だと考えていた。

## 2 中学生の3つのパターン

机の前に座った  
らすぐ勉強を始  
める子になりたい

今まで考察してきたように、現代の中学生たちは、禁欲的という言葉がぴったりとくるくらい、社会規範に順応した考え方をしていた。

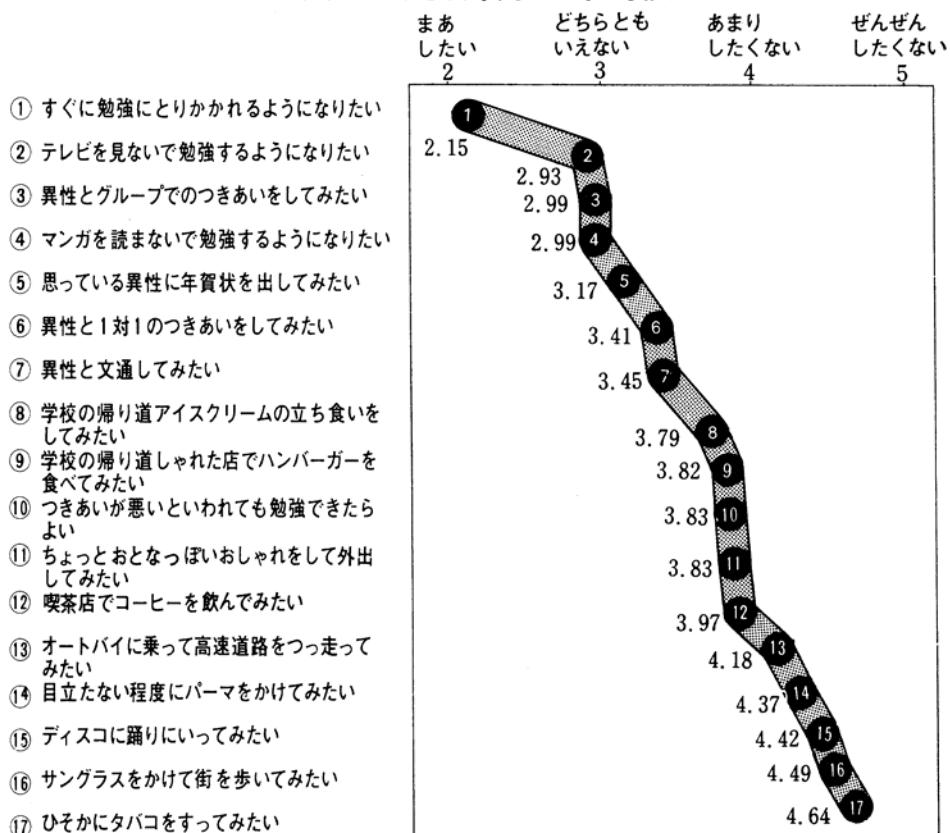
しかし、中学生たちの心のうちには、もう少し生き生きとした感情が脈打っているのではないか。そうした気持ちから、表18に示したような17の行動を示して、「次のようなことをどれくらいしてみたいと思いますか」の形で、中学生たちの欲求を調べることにした。なお、表18のデータを平均値の形で換算したものを、図16に掲げたので、両方に目を通してほしいのだが、「したい」と思っている項目と、「したくな」い項目との対照が著しい。

表18 中学生の生活欲求

%

アイテム	欲 求	とても～まあしたい	どちらともいえない	あまり～ぜんぜんしたくない
すぐ勉強にとりかかれるようになりたい	71.0	13.4	15.6	
テレビを見ないで勉強するようになりたい	41.4	23.2	35.4	
異性とグループでのつきあいをしてみたい	41.2	22.9	35.9	
マンガを読まないで勉強するようになりたい	39.6	24.1	36.3	
思っている異性に年賀状を出してみたい	38.1	27.0	34.9	
異性と1対1のつきあいをしてみたい	23.4	31.1	45.5	
異性と文通をしてみたい	22.6	29.0	48.4	
学校の帰り道アイスクリームの立ち食いをしてみたい	26.3	18.7	55.0	
学校の帰り道しゃれた店でハンバーガーを食べてみたい	19.9	17.3	62.8	
つきあいが悪いといわれても勉強できたらよい	14.1	23.4	62.5	
ちょっとおとなっぽいおしゃれをして外出してみたい	19.5	16.8	63.7	
喫茶店でコーヒーを飲んでみたい	14.6	16.7	68.7	
オートバイに乗って高速道路をつつ走ってみたい	15.8	7.0	77.2	
目立たない程度にパーマをかけてみたい	8.5	10.1	81.4	
ディスコに踊りにいってみたい	7.0	10.2	82.8	
サングラスをかけて街を歩いてみたい	5.7	8.8	85.5	
ひそかにタバコをすってみたい	4.0	6.6	89.4	

図16 生活欲求の平均値



まず、目を下位の項目に向けてみたい。「あまりしたくない」を含めて、75%、つまり、4人のうち3人以上の生徒が、「したくない」と答えた項目は、以下の5つであった。なお、正確を期するために、質問の全文と、( )の中に、「ぜんぜんしたくない」と答えた者の割合を示しておく。

#### 「するつもりがない」のワースト5

- 1位 「ひそかにタバコをすってみたい」 (81.6%)
- 2位 「サングラスをかけて、にぎやかな街を歩いてみたい」 (73.1%)
- 3位 「ディスコやゴーゴー喫茶に踊りに行ってみたい」 (70.0%)
- 4位 「めだだない程度に、髪にパーマをかけてみたい」 (67.5%)
- 5位 「オートバイに乗って高速道路を走してみたい」 (65.7%)

つまり、これらの5項目については、ほぼ7割を越える生徒たちが、「あまり」ではなく、「ぜんぜんしたくない」に反応を示している。こうしたデータからうかがう限りでは、中学生は、親や教師から言わされたからでなく、自分自身の気持ちとして「反社会的」と言われる行動をとることに強い反発を示していると要約できよう。

もっとも、上位の項目として、

「ひそかに思っている異性に年賀状を出してみたい」  
「好きな異性と、グループでハイキングに行くようなつきあいをしてみたい」  
「好きな異性と、日曜日にデートをするようなつきあいをしてみたい」  
などが含まれている。しかし、この3項目の中でも、「とてもしたい」と思っている者がもっとも多いハイキングでも「とてもしたい」率は14.8%にとどまっていた。したがって、「清らかなグループでのつきあい」や「学校の帰り道、ちょっとまわり道をして、しゃれた店でハンバーガーを食べてみる」などが、現在の中学生たちの抱く平均的な欲求の姿なのかもしれない。

それに反し、生徒たちの欲求は、勉強面に強く表れていた。例えば

- 2位 「ぜひ見たいテレビを見ないで、一生懸命勉強するようになりたい」
- 4位 「好きなマンガを読まないで、一生懸命に勉強するようになれたらいい」

に、4割を越える生徒が、「そうなりたい」と答えていた。また、生徒たちが、「もっとも望む」第1位は、表18から明らかなように

「机の前に座れば、すぐに勉強にとりかかれるようになりたい」

であり、この反応は、

とても、 そうしたい	37.9%	まあ、 そうしたい	33.1%
どちらともいえない	13.4%	あまりしたくない	7.2%
ぜんぜんしたくない	8.4%		

のとおりであった。ちがった見方をするなら、「つい、マンガを読んでしまう」「なんとなく、テレビを見続ける」そして、「机に座って、ぼんやりしている」ときが多いからそれではいけないと考えているのであろうが、それにしても、7割の生徒が、「机に座ったら、すぐに勉強にとりかかれるような人間になりたい」と望んでいるのは、予想外の結果であった。先ほどの「理想的な中学生像」の分析と同じように、生徒たちの「欲求」の世界にも、勉強が暗い影を投げかけているのを感じざるを得ないデータではある。

#### 社会規範と勉強とを軸として

今まで、中学生たちの欲求を、単純集計のデータをもとにして考察してきた。

次に、こうした生活欲求を、もう少し、深く考察するために、やや角度の異なる分析方法を使うことにしたい。利用した方法は、「数量化III類」といわれるもので、これは、「似たもの集め」の俗称が示すように、回答者の反応パターンを操作し、似たもの同士を平面上で一群にまとめる手法である。

数量化III類についての理論的な背景は、専門書にゆずるとして、さっそく、具体例に則して、手続きを紹介するようにしたい。

先にふれた表18には、生徒たちの欲求を尋ねる項目が17含まれていた。こうした項目のことを「アイテム(Item)」とよぶが、各アイテムは、5段階評価を尋ねていたので、それぞれ、5つ——「とてもしたい」から「ぜんぜんしたくない」まで——の回答に分かれていた。この回答を「カテゴリー(Category)」とよぶ。集計の便宜上、「とてもしたい」から「どちらともいえない」までを1つ、「あまりしたくない」から「ぜんぜんしたくない」までを1つにグループ化すると、各アイテムは、2つのカテゴリーに集約できる。アイテムが17個で、各アイテムが2つのカテゴリーに分かれているので、中学生たちの欲求を分析するために、34のアイテム・カテゴリーが用意された計算になる。

数量化III類は、関連の強さに着目して、いくつかの軸を設定するので、まず、I軸の意味を考えてみたい。

I軸のアイテム・カテゴリーのスコアを表19に示したが、このうち上位、下位の5項目を、抜き取って、表にまとめると、以下のとおりとなる。

	上 位		下 位	
1	好きな異性とグループでのハイキング	したくない	ひそかにタバコをすう	したい
2	1対1で異性と日曜日にデート	したくない	サングラスをかけて街を歩く	したい
3	思いをよせている異性に年賀状を出す	したくない	ディスコやゴーゴー喫茶へ行く	したい
4	異性と文通をする	したくない	めだたない程度にパーマをかける	したい
5	学校の帰り、アイスクリークの立ち食い	したくない	オートバイに乗って、高速道路をつつ走る	したい

これらのアイテム・カテゴリーから分かるように、I軸は「社会規範」に関連しており、上位の5項目は、異性との関係を中心とした「衝動の弱さ」、あるいは、衝動があるのを抑えようとする「禁欲的」な態度の象徴である。それに反し、下位の5項目は、「衝動のままに行動したい」というような「衝動型」の態度を象徴している。

次に、II軸の内容を考えてみたい。II軸のカテゴリー・スコアについても、全体の数値を表20に示したが、ここでも、上位、下位の5項目を抜き出して、II軸の性格を考えることにしよう。

	上 位		下 位	
1	「つきあい」が悪いといわれても勉強する	したい	机の前に座って、すぐ勉強をする	したくない
2	好きなマンガを読まずに勉強する	したい	テレビを見ないで勉強をする	したくない
3	テレビを見ないで勉強する	したい	マンガを読まないで、勉強をする	したくない
4	異性と文通したい	したい	ひそかにタバコをすう	したくない
5	ひそかに思っている異性に年賀状を出す	したい	サングラスをかけて、街を歩く	したくない

内容から察し得るように、II軸は、勉強に関連して、上位の5項目は、「意欲的」な態度を、下位は、「やる気のなさ」、あるいは「無気力ぶり」を意味している。したがってI軸、II軸について、

I軸 社会規範 禁欲の一衝動的 II軸 勉 強 意欲的一無気力的

のような意味づけを考えることができる。

**アウトロー派  
は、中学生の  
10~15%**

そして、このI軸、II軸とを交差させ、サンプル平均を求めて、平面上に点をとると、図17のような結果が得られる。

図が示すように、中学生たちは、大別して、3つのタイプに分かれている。そこを、点線内のカテゴリーに着目して、各タイプを特徴づけると、次のようになる。

### 1. アウトロー派

サングラスをかけ、髪にはめだたない程度にパーマをかけるなどの、ちょっとおとなっぽいおしゃれをしてディスコに岡かけたい、と思っている。そして、彼らはあるときは喫茶店にも顔を出しひそかにタバコをすい、うさばらしのために、オートバイで、高速道路を走ってみたいとも思う。しかし、勉強には意欲を示さず社会の「望ましい中学生像」からかなり逸脱しているのが、このタイプの特性である。したがってこのタイプは「アウトロー派」と名付けられよう。しかし、このタイプに属する中学生は全体の1~2割ほどの少数派にすぎない。

図17 中学生のタイプ

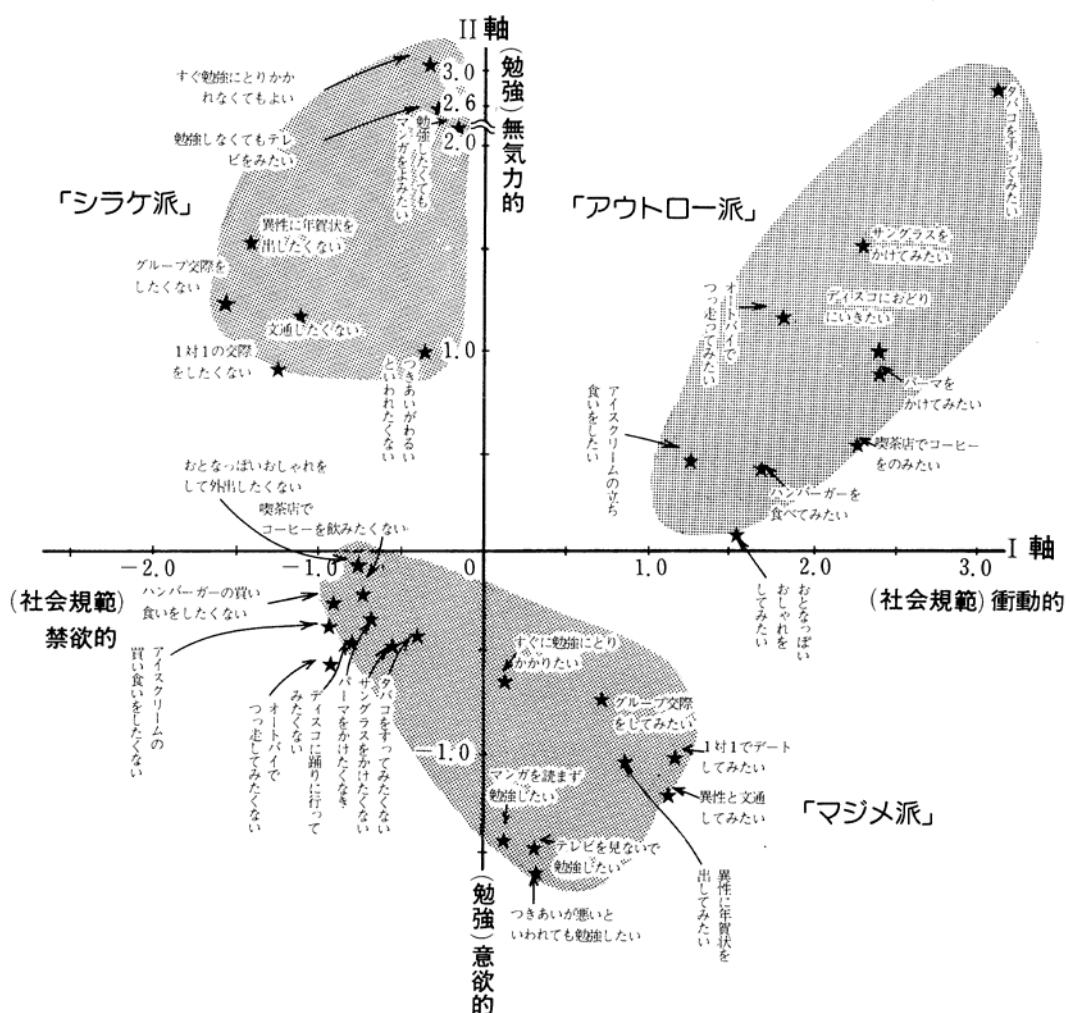


表19 生活欲求 I 軸のカテゴリー・スコア

ア イ テ モ	カ テ ゴ リ ー	I 軸
好きな異性とグループでハイキングに行くようなつきあい	ぜんぜんしたくない	-1.492
1対1で異性と日曜日にデートするようなつきあい	"	-1.287
ひそかに心に思っている異性に年賀状を出す	"	-1.246
異性と文通する	"	-1.096
学校の帰りに近くのお店でアイスクリームの立ち食い	"	-0.982
学校の帰りにまわり道をしてちょっとしゃれた店でハンバーガーを食べる	"	-0.968
ちょっとおとなっぽいおしゃれをして外出する	"	-0.935
喫茶店でコーヒーを飲んでみる	"	-0.870
オートバイに乗って高速道路をつっ走ってみる	"	-0.581
目立たない程度に髪にパーマをかける	"	-0.556
ディスコやゴーゴー喫茶に踊りに行ってみる	"	-0.515
サングラスをかけてにぎやかな街を歩く	"	-0.474
ひそかにタバコをすってみる	"	-0.378
友だちからは「つきあいが悪い」と言われても一生けん命勉強できたらいい	ぜんぜんそんなことはない	-0.184
机の前に座れば、すぐに勉強にとりかかれるようになりたい	"	-0.132
ぜひ見たいテレビを見ないで一生けん命勉強するようになれたらいい	"	-0.110
好きなマンガも読まないで一生けん命勉強するようになれたらいい	そうだ	-0.073
机の前に座ればすぐに勉強にとりかかれるようになりたい	"	0.024
好きなマンガも読まないで一生けん命勉強するようになれたらいい	"	0.041
ぜひ見たいテレビを見ないで一生けん命勉強するようになれたらいい	"	0.059
友だちからは「つきあいが悪い」と言われても、一生けん命勉強できたらいい	"	0.303
ひそかに心に思っている異性に年賀状を出す	そうしたい	0.813
好きな異性とグループでハイキングに行くようなつきあい	"	0.813
異性と文通する	"	1.013
1対1で異性と日曜日にデートするようなつきあい	"	1.063
学校の帰りに近くのお店でアイスクリームの立ち食い	"	1.175
ちょっとおとなっぽいおしゃれをして外出する	"	1.592
学校の帰りにまわり道をしてちょっとしゃれた店でハンバーガーを食べる	"	1.637
喫茶店でコーヒーを飲んでみる	"	1.884
オートバイに乗って高速道路をつっ走ってみる	"	1.949
目立たない程度に髪にパーマをかける	"	2.326
ディスコやゴーゴー喫茶に踊りに行ってみる	"	2.599
サングラスをかけてにぎやかな街を歩く	"	2.725
ひそかにタバコをすってみる	"	3.100

表20 生活欲求II軸のカテゴリー・スコア

ア イ テ ム	カ テ ゴ リ	II 軸
友だちからは「つきあいが悪い」と言われても一生けん命勉強できればいい	そうだ	-1.598
好きなマンガも読まないで一生けん命勉強するようになれたらいい	"	-1.490
ぜひ見たいテレビを見ないで一生けん命勉強するようになれたらいい	"	-1.459
異性と文通する	そうしたい	-0.936
ひそかに心に思っている異性に年賀状を出す	"	-0.799
1対1で異性と日曜日にデートするようなつきあい	"	-0.677
机の前に座ればすぐに勉強にとりかかれるようになりたい	"	-0.631
好きな異性とグループでハイキングに行くようなつきあい	"	-0.588
オートバイに乗って高速道路を走ってみる	ぜんぜんしたくない	-0.356
サングラスをかけてにぎやかな街を歩いてみる	"	-0.297
ひそかにタバコを吸ってみる	"	-0.290
ディスコやゴーゴー喫茶に踊りに行ってみる	"	-0.281
学校の帰りに近くのお店でアイスクリームの立ち食い	"	-0.201
目立たない程度に髪にパーマをかける	"	-0.193
学校の帰りにまわり道をしてちょっとしゃれた店でハンバーガーを食べる	"	-0.171
喫茶店でコーヒーを飲む	"	-0.157
ちょっとおとなっぽいおしゃれをして外出する	"	-0.015
ちょっとおとなっぽいおしゃれをして外出する	そうしたい	0.026
学校の帰りに近くのお店でアイスクリームの立ち食い	"	0.248
学校の帰りにまわり道をしてちょっとしゃれた店でハンバーガーを食べる	"	0.289
喫茶店でコーヒーを飲む	"	0.340
目立たない程度に髪にパーマをかける	"	0.806
1対1で異性と日曜日にデートするようなつきあい	"	0.819
友だちからは「つきあいが悪い」と言われても一生けん命勉強できたらいい	そうだ	0.971
異性と文通する	そうしたい	1.013
オートバイに乗って高速道路を走ってみる	"	1.194
ひそかに心に思っている異性に年賀状を出す	"	1.225
ディスコやゴーゴー喫茶に踊りに行ってみる	"	1.292
サングラスをかけてにぎやかな街を歩く	"	1.709
好きな異性とグループでハイキングに行くようなつきあい	"	1.784
ひそかにタバコを吸ってみる	"	2.383
好きなマンガも読まないで一生けん命勉強するようになれたらいい	そうだ	2.639
ぜひ見たいテレビも見ないで一生けん命勉強するようになれたらいい	"	2.698
机の前に座ればすぐに勉強にとりかかれるようになりたい	"	3.433

## 2. シラケ派

これは、社会規範も多少気にはしているが、それよりも「勉強」に対する無気力さが特性をなしている。つまり、すぐに勉強にとりかかりたいという気持ちは持たずつきあいが悪いといわれるほどに勉強する気もない。そして、勉強のために好きなテレビやマンガを我慢しようともしないのである。こうした彼らは、また、好きな異性と直接に交際したくもなく、異性との文通はもとより、年賀状さえ出したくないという。異性との接触意欲に乏しいうえに勉強をする気にもなれない。つまり、すべてのことに意欲を喪失し仲間とも孤立して、テレビやマンガで時を過ごしているのが、彼らである。他人との接触を断ち、無気力で、孤独を楽しむ。こうした彼らを、「シラケ派」とでもよべばよいのであろうか。中学生の中で、彼らの占める割合は、ほぼ2~3割程度である。

## 3. マジメ派

このグループを特徴づけているのは、一口に言うと、勉強に対する意欲である。彼らは、わからない程度であっても、パーマをかける気もなく、おとなっぽいおしゃれをして、喫茶店やディスコに出入りをする気もない。そして、見たいテレビや読みたいマンガを我慢しても、そのうえ、つきあいが悪いといわれても、勉強ができるようになりたいと思っている中学生の姿が浮かんでくる。もちろん彼らも、思春期の中学生らしく、ひそかに思いをよせている異性のことが気になる。1対1の交際ができるのにこしたことはないが、せめて、グループでの交際ぐらいはしたいと思う。それもだめなら、年賀状ぐらいは出したいと考えている。「マジメ派」とでも名づけ得る彼らは、中学生全体の中で、6~7割を占め、極めて平均的な中学生の姿を示している。

### 3つのグループ のプロフィール

このように、社会規範に対する禁欲と衝動、勉強についての意欲と無気力を軸として、中学生を、ほぼ3つのグループに分けることができた。そして、「マジメ派」が6~7割を占め、「アウトロー派」が少数にすぎないことも明らかにしてきた。

そこで、上記のタイプを支えているのが、どんな属性の持ち主なのかを、もう少し、考えることにしたい。具体的には、性、学年、学業成績などのデモグラフィック(demographic)特性やサイコグラフィック(psychographic)特性にしたがって、サンプルを分類し、それぞれのサンプル集団のもつI軸、II軸についての平均値を求める作業である。

まず、図18に目をとめてほしい。これは、主として、アウトロー派の特性をつかむために作図を試みたものだが、これと、もう1つ、主として、マジメ派グループを把握するために作図した図19とを併せて考察すると、3つのグループを支えている属性は、以下のように要約できよう。

#### ① アウトロー派のプロフィール

つきあっている異性がいて、中学3年生で、こづかいも豊富に持ち、どのクラブにも入らず、勉強時間が短く、学力面でも下位に位置している。

#### ② マジメ派のプロフィール

勉強時間が長く、成績もますますで、性別に着目すると、女子の方が多い。そして、運動クラブなどに入り、グループで異性とつきあいたいと思っているような生徒たちである。

#### ③ シラケ派のプロフィール

図示したような2つの軸からは、「シラケ派」グループのプロフィールは、いまひとつ明らかでない。「ひそかに思いをよせている異性のいる男子」、その他、学年では中学1年生、また、図は省略したが、「授業が終ると、すぐに帰宅する」(I軸-0.85, II軸0.25)「文化系のクラブに所属」(I軸-0.08, II軸0.10)などであった。つまり、シラケ派グループは、学校生活にあまり積極的でない孤立型の中学生で、彼らの中の何割かは、学年が高まるにつれて、アウトロー派化する可能性を含んでいる。

図18 各タイプを支える属性

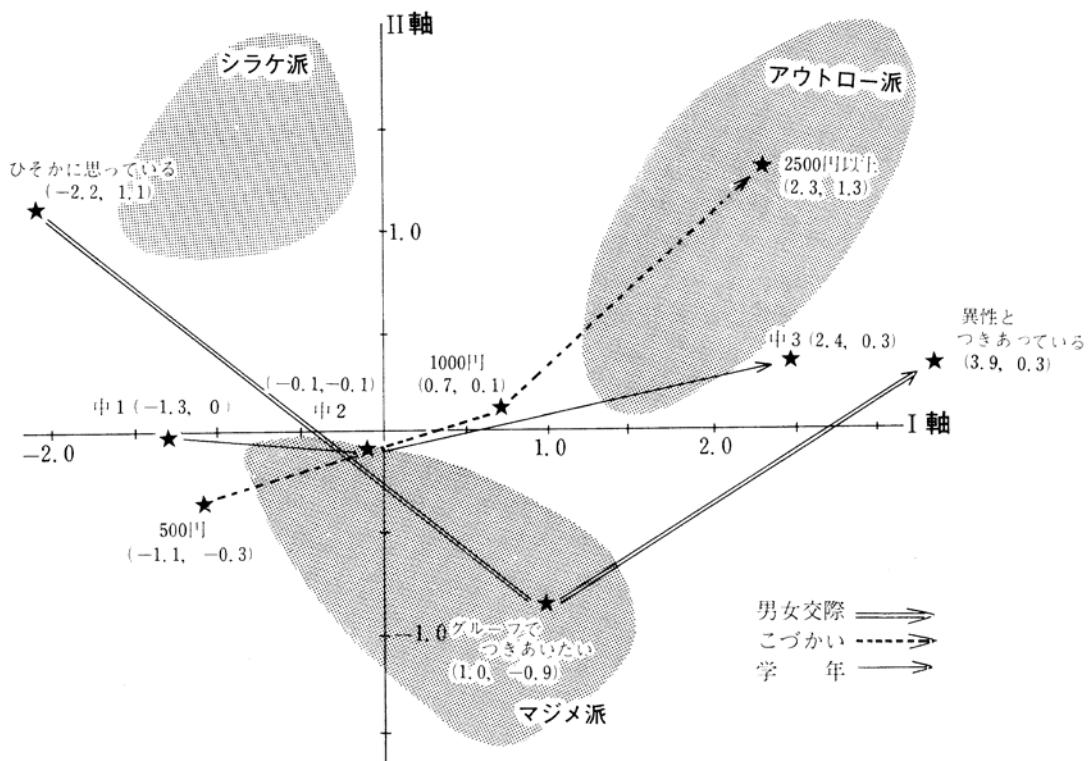
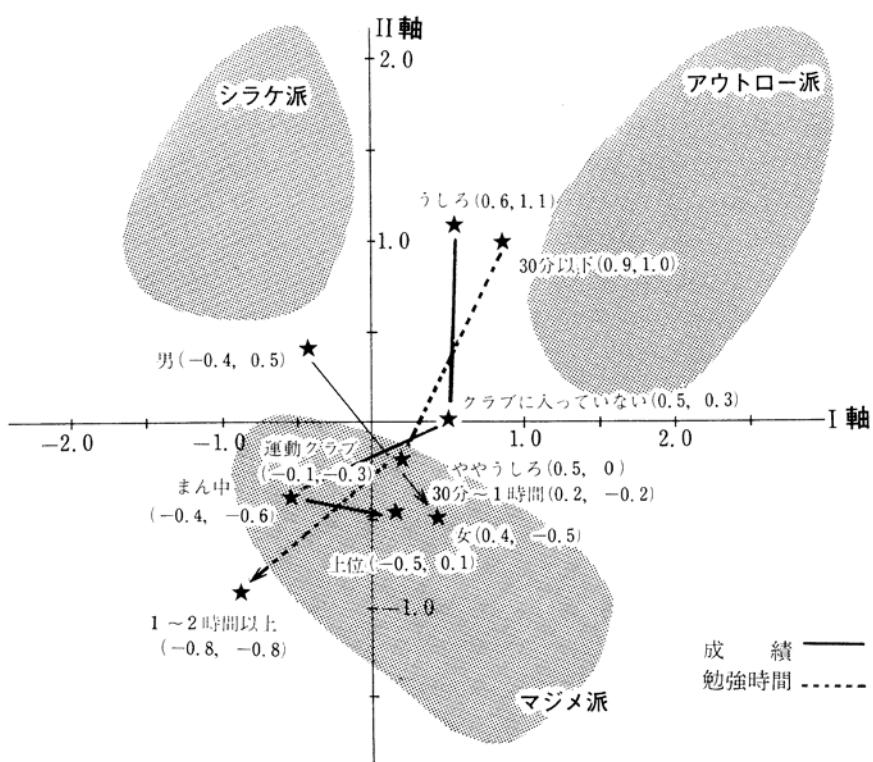


図19 各タイプを支える属性



### 3 まとめにかえて

中学生の余暇という言葉に非行を連想しやすい。冒頭でもふれたように、我々おとなたちは、中学生のモダンなファッショնに目を奪われて、現代の中学生は理解しにくいと思いやしい。

しかし、今回の分析によれば、先ほどのアウトロー派のような衝動的な行動をとる中学生は最大に見積もっても、15%程度にすぎなかった。そして、過半数の生徒たちはかたくなといえるほど堅実な中学生像を抱いていた。「髪にやわらかいパーマをかける」や「透明なマニキュアをつける」などは、中学生にあるまじき行動であると信じていたのが、その一例となろう。

そうした堅実さが、もっとも端的に示されたのが異性との関係で、1対1でのつきあいをしている中学生は、わずか数%にすぎず、その他の生徒は「できることなら、ハイキングにでも行き、グループでのつきあいをしたい」と思いながら、現実には、片思いの時を過ごしていた。

これらのデータに関する限り、現代の中学生は古風ですらある。そのうえ、彼らは、できる限り、マンガを読む時間を減らし、好きなテレビを見る時間を少なくしたいと考えている。ついテレビを見てしまうのが現実であるにせよ、彼らは、自分の余暇を少なくしても勉強に打ち込もうとしていた。つまり、暴走や非行は、ほんの一握りの中学生の姿にすぎず、大多数の中学生は社会規範に従順な若者たちであった。

しかし、そうした従順さの影に、危惧がしのびよってくるのを感じたのは、筆者だけなのであろうか。第III章でふれたように、中学生たちが、もっとも望む特性は「机の前に座ったら、すぐに勉強にとりかかるようになる」態度であった。

偏差値によって、入学できる高校が決まる。こうした状況の中では、学業成績のみが、唯一の価値で、余暇などというのは、罪悪視しなければならない対象なのかもしれない。そうした気持ちから、中学生は、わずかな憩いの時にもやましさを感じ、勉強にせいを出す。しかし、学業成績に自信を持てる者はたかだか2割にすぎず、その他は、学力競争から脱落していく。深夜放送から流れてくるパーソナリティの語りに、人生のオアシスを見出す中学生の姿に、彼らの挫折感を感じる思いがする。

長い人生の間に、知識や技術を習得する機会は多い。しかし、異性に胸をときめかし、友だちとの友情を誓い、そして、体力を養い、自分の生きていく目標を定める、こうした青春の時期は、人生の中で、二度と訪れないものである。中学生たちにとって、余暇とは、決して、「余った暇な時間」なのではない。余暇の時を通じて、人間性は培われていくにもかかわらず余暇を持ち得ぬ中学生は、人間性を育てる場を、どこに見出したらよいのであろうか。